

巻頭によせて



校長 北 村 聡

Kitamura Satoshi

暑い夏が過ぎ、間もなく秋風蕭条の時がやってこようとしています。文豪夏目漱石の作品「門」の中に「お米（ヨネ）が『本当に有り難いわね。ようやくのこと春になって』といって、晴れ晴れしい眉を張った。宗助は縁に出て長く伸びた爪を剪りながら、『うん、しかしまたじきに冬になるよ』と答えて、下を向いたまま鋏を動かしていた」という件があります。

宗助は、春が来た喜びを夫と共にしようとしている妻の気持ちに水をさす様な、しらけた返答をしています。拙宅なら夫婦喧嘩に発展しそうな危うい返答です。

ある文人は「漱石にはより重苦しい暗鬱な時代到来に対する予感のようなものがあつたのか。」と述べています。漱石は特にその前半の作品群の中で、徹底的な文明批判と社会悪に対する挑戦を露わにしていますから、穿った見方をすればそのような考えをここでも盛り込んだのかも知れません。

またしかし違った見方をすれば、宗助は口べたで妻の気持ちに素直になれないでいるちょっとひねくれた男ではありますが、時節の移り変わりは早いもので、貴重な春のひとつときを大切に過ごそうと主張しているようにも感じられないでしょうか。

ともすれば現代に生きる我々は日々勉強や仕事、人との付き合いや多量の情報の渦の中で、季節の移り変わりや、その日その日の大切さを感じる事が少なくなっています。日々は繰り返しのようではありますが、同じ道を通ることは二度とありません。今日という日をしっかりとつかんでいきたいとあらためて思うこの頃です。

生徒の皆さんには無限の可能性が備わっています。「到底自分には出来そうもない」と諦めることは本当にもったいない事です。壁にぶつかっても悩むのではなく、知恵を絞って考え続ければ何らかの道筋が見えてきます。今日を大切に、勉強にも部活動にも「不撓不屈」の心を見失う事無く、成長してくれることを期待致します。